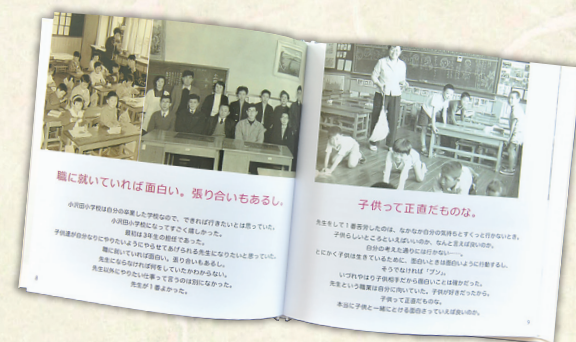


取材開始から約3か月で
お届けいたします。



1
ご相談

まずはお問い合わせから

お気軽にお電話やメールでお問い合わせください。
どういう流れで制作するの？ 実際により自分史を見たいなど、
何でもご相談ください。

2
事前準備

お申し込み後のご準備

事前取材シートをご提出ください。また、掲載したい写真を選んでご準備ください。

前金のお振込み

前金をお振込みいただきます。

ご入金の確認後、お電話かメールで取材の日程や場所などを打ち合わせします。

3
取材

インタビュー

インタビューは2回(1回2時間)行います。人生の思い出を
たくさんお話しください。その際、ご準備いただいた写真や
資料を記者にお預けください。お客様のご自宅または読売新聞
東京本社で取材いたします。



約1か月

4
編集・校正

取材を終えた後、記者が文章を執筆し、
デザイナーがレイアウトして美しく
仕上げます。2回の校正作業で内容を
ご確認いただきます。



約1か月

5
印刷・納品

残金のお振込み

残金をお支払いください。オプションを追加された場合は、オプション料金を
あわせてお振込みください。

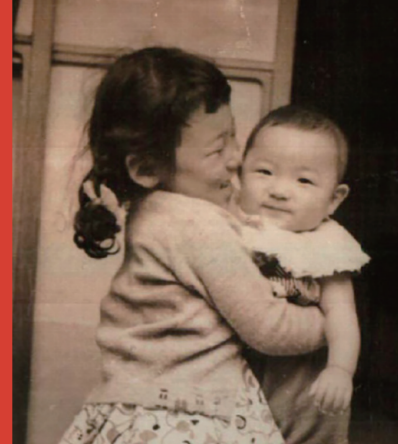
納品

結いごとより完成した本をお届けします。お預かりした写真と資料を返却します。
※注文状況によりお届けまでの期間が前後する場合があります。

約1か月



自分の記録を
まとめたい



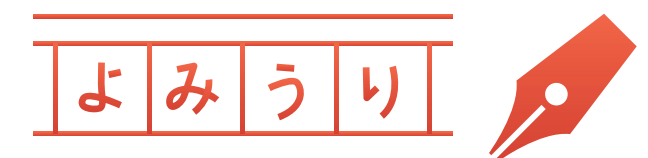
大切な人に
思いを伝えたい

ご夫婦、ご家族の
記録を一冊に



生きた証を
本にします

読売新聞があなたの思い出を本にします



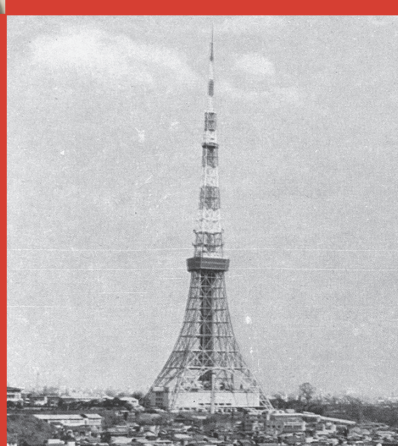
自分史

結いごと版

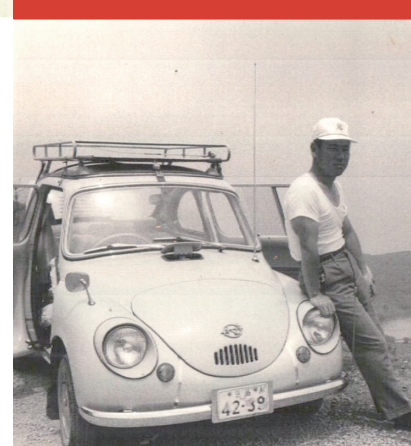
読売新聞 × 結いごと

泉ピン子さんの 自分史作り

泉さんの自分史づくりを
取材風景とともに紹介します。
中面をご覧ください。



読売新聞の紙面や
報道写真で時代性も



絵本のような
スタイルで

読売新聞 × 結いごと

お問い合わせ：結いごとサポートセンター 平日9:00～17:00(土日、祝日、年末年始は休業)

0120-268-074 info@yui-goto.com

※記載内容は予告なく変更する可能性があります。

読売新聞の取材力と編集力で自分史づくりをお手伝いします！



インタビューと文章はプロにお任せ

ご自身で文章を書かなくても、読売新聞の記者経験者に思い出を話すだけで自分史が出来上がります。経験豊かなベテランがあなたの話を引き出します。



絵本サイズで読みやすい

一般的な単行本の自分史とは異なり、思い出の写真がいっぱいの絵本スタイル。ページをめくりながら家族や友人との話が弾みます。



紙面と報道写真であの日がよみがえる

懐かしい報道写真や、大切な日の新聞紙面も掲載できます。あなたの歩みを時代とともに記録します。



仕 様

スタンダード

サイズ	縦21cm×横21cm
色	オールカラー
ページ数	24ページ(扉・奥付含む)
訪問取材回数	2時間×2回
冊数	6冊 ご本人用(メッセージページがないもの)×5冊 ご家族用(メッセージページがあるもの)×1冊

※サイズの大きいプレミアムもございます。詳しくはお問合せください。

※取材等の交通費・商品等の送料は別料金です。

充実したオプションサービス

ご要望に応じてページ数や冊数も増やせます。絵画や短歌などの作品を織り交ぜる、ペットとの思い出を一冊になど、内容はカスタマイズできます。お気軽にご相談ください。



「誰にでも残したいことがあるはず。自分と向き合って探してみて」 泉ピン子さんの 自分史作り

女優の泉ピン子さんが自分史「ピン子、自分と向き合ってみました」を制作。取材風景とともに読売新聞本紙に掲載された一部をご紹介します。



渡る世間を形に残す

「自分の歴史だけど、見応えあるわ。なんだかもったいないぐらい」。泉さんは、出来上がったばかりの自分史を笑顔で見つめた。全24ページ、表紙の写真には、実母の喜美代さんに抱かれた幼い自分が写る大切な1枚を選んだ。

「よみうり自分史」は、読売新聞の記者経験者が本人に取材し本にまとめるのが特徴。

「人生を振り返る取材は今回が初めて。そんな年になったのね。充実し、濃密な人生だと思っていたけれど、意外とシンプルだったわ」



2018年2月20日付朝刊紙面

自分史では感謝の思いを込めて、「私の人生を語る時、橋田先生との縁に触れないわけにはいきません」と記した。プライベート旅行の2ショット写真もふんだんに載せた。

2年前に体調を崩し、「終活」を意識している泉さん。数々の賞状やトロフィーは廃棄した。「夫は処分しにくいだろうから、私が片付けるのが親切」とほほ笑む。一方で完成した自分史については、「本になると、生きた証しが残る。見た人がふと思い出してくれたらうれしい」と話す。

「ピン子、自分と向き合ってみました」というタイトルは自身で考えた。「誰にでも残したいことがあるはず。自分と向き合って探してみて」。泉さんのメッセージだ。

誰にでもドラマがある

泉さんの取材・執筆を担当した岡島毅記者は、83年入社ベテラン。社会部で主に警察を担当し、ロス疑惑を始め数々の事件取材した。東北総局(仙台市)では東日本大震災も経験した。

「本にするような特別なことは何もないと思っているかもしれないが、誰にでもドラマはある。みなさんの物語を引き出す手伝いをしたい」と語る。



泉ピン子さんを取材する岡島毅記者